



## 略歴

Masakane Mizutani

水谷糖質科学振興財団設立者

# 水谷當稱

1910. 4. 19 - 2009. 8. 29

水谷當稱氏は1910年に東京新宿に生まれ、1934年東北帝国大学法文学部経済学科を卒業した。まず三菱重工業川崎機器製作所に職を得たが、やがて第二次世界大戦となり、勤務10年で敗戦を迎えた。戦後の混乱と荒廃した時代にあって、氏は日本の復興・再建のためには科学技術の振興が不可欠であると思いを新たにされた。

折しも、義兄であり、日本の生化学分野の草分けであった故江上夫二夫博士（元東京大学教授・日本学術会議会長・日本学士院賞受賞）から、氏はコンドロイチン硫酸ナトリウム（Sodium chondroitin sulfate）の医薬品事業化を勧められた。江上博士はこの多糖体（polysaccharide）の生化学研究を長年進めており、

この物質が安全で人体に有用な薬理作用をもたらすだろうと確信していた。氏はこの提案に大変興味を抱いたものの、専門外分野であり、起業に当たっては資金調達など難問が山積していた。しかし、幸いなことに、氏の知己には基礎科学、医学、企業などいろいろな分野で卓越した専門家がいた。彼らは、氏の熱心な相談に応じ、助言と便宜を図った。これらの人々の助力が如何に有益であったか、氏は後々まであらゆる機会に語ることになる。

1948年、氏は、興生水産株式会社の高田利種氏と出会い、神奈川県久里浜に土地を得て、共同でコンドロイチン硫酸の企業化を模索することになった。

本人自身、鯨・サメの軟骨からこの多糖体の抽出、精製の作業に取り組み、物作りの貴重な体験をした。試作品はやがて経口医薬品となり、更に高純度化にも成功して注射薬への道が開かれた。こうして1950年に世界で初のコンドロイチン硫酸ナトリウム医薬品が上市された。以後、この薬品は多方面の疾患に有効であることが臨床的に確認され、また、安全性にも恵まれて極めて寿命の長い医薬品となった。

コンドロイチン硫酸医薬品が軌道に乗り始めた1953年、企業名は株式会社生化学研究所に改められた。氏には当初から「安全で有用な医薬品を広く世界に供給することにより、人類の福祉に貢献したい」という理念があった。氏は企業プロセスで、物作り、薬効証明、安全性試験など諸体験を通じて、基礎研究や技術が如何に重要であるかを実感した。この一見アカデミックな企業名への変更は、理念実現に向けて学問重視への姿勢を表したものであろう。こうして企業の基盤が確立された1962年、社名は生化学工業株式会社に再び変更され、今日に至っている。

氏は事業基盤の安定化を図る一方、産学協同が重要であると考え、複合糖質科学振興への援助活動を始めた。1957年にはムコ多糖体研究会の発足を支援し、今日の日本結合組織学会の設立に寄与した。また、日本で開催された国際生化学会（1967年）や国際複合糖質シンポジウム（International Meeting on Glycoconjugates, 1981年）の折には、独自の国際シンポジウム「光輪閣シンポジウム」や「プロテオグリカンミーティング」（Proteoglycan Meeting）をそれぞれ開催し、複合糖質科学研究者の国際的な学術交流を支援した。

氏はコンドロイチン硫酸医薬に続いて、デキストラン硫酸、リゾチーム、カリクレインなどの医薬原体や各種複合糖質研究試薬、エンドトキシン検出試薬の商品化にも成功した。これらの企業活動の発展を支える財政的、技術的基盤は、コンドロイチン硫酸医薬品にあった。しかし、企業の売上高は順調に増加していたものの、経常利益は1970年以降減少し始め、新たな企画が迫られていた。その頃、岩田修造博士から複合糖質研究会のメンバーを介して、ヒアルロン酸ナトリウムの企業化の相談がもちこまれた。この多糖体は、当時コロンビア大学教授であったアンドレ・バラシュ（Endre Balazs）博士によって研究が進められており、動物実験により関節炎に有効であることが証明されていた。

氏はヒアルロン酸（hyaluronic acid）の医薬開発に強い関心を持ち、その開発目標を、コンドロイチン硫酸のような医薬原体としてではなく、最終医薬品にしよう決心した。しかし、ヒアルロン酸は極

めて粘性の高い高分子多糖体であり、これを生体投与可能な高純度医薬品にするには、技術的難問が山積していた。この問題解決には、同様に高粘度多糖体であるコンドロイチン硫酸製造のノウハウが非常に役立った。すなわち、氏が創業以来築いてきた技術基盤が非常に効率的に働いたのである。こうして1987年、氏は世界で初めてヒアルロン酸ナトリウムの変形性膝関節症治療薬「アルツ(Artz)」の上市に成功した。

アルツの爆発的な売上により、生化学工業の経常利益は一挙に10倍以上に達し、経営基盤は著しく安定した。氏は1989年、株式を店頭市場に公開し、社の企業信用力を高めるとともに一層の堅実経営を図った。他方、長年の理念であった「糖質科学振興と人類福祉への貢献」を具体化するため、1992年10月、私財12億円および生化学工業株式20万株を投じて「財団法人水谷糖質科学振興財団」を設立した。その設立趣意書には、糖質科学支援の目的とともに国際的貢献への姿勢を盛り込んだ。氏は自ら監督官庁へ赴いて、その趣旨実現のため奮闘し、公益法人では未だ稀な世界的レベルでの助成事業を行う財団として、設立許可取得に成功した。

氏はこれまでに、神奈川県製薬協会副会長、日本製薬団体連合会評議員、日本医薬品原薬工業会理事、日本経営者団体連盟常任理事、関東経営者協会常任理事などを歴任し実業界でも活躍した。また、1994年には社団法人発明協会の関東地方発明表彰において関東通商産業局長実施功績賞を受賞、1996年には、ヒアルロン酸からなる複合糖質薬剤の開発育成による功績により科学技術庁長官賞を受賞している。

ヒアルロン酸製剤の順調な発展を機に1989年6月、氏は生化学工業会長に退き、その後、1998年には取締役および財団理事長も退任していっさいの公的活動から退いた。会社の創立から基盤確立まで、40年余に亘り企業人として絶え間ない献身の日々であったが、その苦勞を支えた妻朝子について、氏は社内報でこう記している。「家内は一度も不平不満をもちしたことなく、又、子供をのびのびと望む方向に進ませてくれたことは本当に有難いことと思っています。もしも家内がいなければ、この仕事も途中で挫折していたかも知れません」

氏はクラシック音楽を好み、若い時は良く歌った。ピアノを弾く妻や音楽大学でバイオリン、フルートを専攻した二人の娘と共に、家庭内音楽会を開く時間を氏は楽しみにしていた。上の二人の息子は理系大学を出て研究者となり、末の息子は氏の事業を継いで企業家および現在の財団理事長となっている。